On Japanese Derivational Noun Phrases
– From the Standpoint of Argument Structure and Meaning –

# 日本語派生名詞句に関する一考察

## ― 項構造と意味の観点から ―

松 下 達 彦

### 1．本稿の問題意識

筆者は日本語表現の特色を名詞句形成の観点から考察していくことを主眼として研究を進めているが，名詞句をめぐる問題の一つに派生名詞句（＊1）があげられる。((1)〜(5)の下線部は派生名詞句を示す。)

(1) a. 太郎が泳ぐ。
 b. 太郎の泳ぎはすばらしい。
(2) a. マンションを建設する。
 b. 太郎はマンションの建設に反対だ。
(3) a. 太郎がりんごを食べる。
 b. 太郎のりんごの食べ方はよくない。
(4) a. 今日の空は青い。
 b. 今日の空の青さが目にしみる。
(5) a. このりんごは赤い。
 b. このりんごの赤みは着色料によるものだ。

日本語の名詞句をめぐっては，文による名詞の修飾（関係節）・文の名詞化・補文構造・名詞述語文等がこれまで数多く論じられてきた。しかし，派生名詞句については，動詞類（本稿では動詞・形容詞・形容動詞を「動詞類」と総称する）のもつ項構造（argument structure＝動詞類が要求する補語の意味役割（$\theta$-role）のリスト（＊2））を保持している場合が数多く見られる点で文の名詞化に近い性

質を有するにもかかわらず，その意味・構造の研究が相対的に少なかったように思われる。

本稿では以下の１～４を主名詞（head noun）とする名詞句を派生名詞句と呼び，考察の対象とする。

1　動詞連用形からの派生名詞（例文(1)）
2　サ変動詞を派生する名詞（例文(2)）（＊３）
3　上記１，２を語基とする合成名詞（例文(3)）（＊４）
4　形容詞・形容動詞の語幹に名詞化接尾辞「――さ」，「――み」を加えた名詞（例文(4)(5)）

派生名詞には，名詞化に際してさまざまな意味変化（semantic change（＊５））が生じている語が数多くある。その場合，意味変化のあり方によって項構造にも変化の生じることが予想される。

「太郎がプールへ飛び込む」と「太郎のプールへの飛び込み」の対応を考えた場合，動作主（＊６）「太郎」・着点「プール」の二つの項は派生名詞句においても表現されている。「飛び込み」は語レベルで基本的に対応する動詞「飛び込む」の意味を保持し，項構造にも変化がない。しかし，「次郎が絵をかく」に対し，「次郎の絵かき（はうまい）」とはいいにくい。「絵かき」が動作主の意味をあらわすため，動作主を示す「次郎」は派生名詞句内で「絵かき」と共起できないのだと考えられる。一方，「次郎の絵のかき方」とはいえる。この場合，動作主「次郎」・対象「絵」ともに派生名詞句内で表現されている。これは派生名詞の意味変化のあり方によって項構造の変化も一様でないことを示す一例である（＊７）。

本稿では主として動作主・経験者（＝感覚・感情等の精神活動・状態を経験する存在）及び対象を示す項について「項構造のくずれ」と派生名詞の意味変化の相関を考察する。派生名詞の意味変化における多義・派生および派生義の慣用化の段階を共時態の観察によって推論することが本稿の目的である。なお，文と派生名詞句の対応を考えた場合の「項構造の保持」と「項構造のくずれ」について，以下の(6)(7)のように定義しておく。

(6)「項構造の保持」＝動詞類の要求する項がすべて派生名詞句で表現され得る

こと

(7) 「項構造のくずれ」＝動詞類の要求する項の一部または全部が派生名詞句において表現され得ず，項によって表現され得る意味が派生名詞句と動詞類で異なること。

以下の具体的表現の検討では項が表現され得るかどうかが問題なのであるから，文脈による省略があり，文脈から具体的な項が想定される場合は項構造のくずれではない。また，文においても項の意味を一般化（generalization）して表現するために項を消滅させることは可能であり（例文(8)(9)のａ.）このような随意の消滅は派生名詞句においても可能である（例文(8)(9)のｂ.）。これも，本稿で述べる派生名詞化による項構造のくずれとは異なる。

(8) a. 人間が我慢するのにも限度がある。

b. 人間の我慢にも限度がある。

（何を「我慢する」のかは問題にされていない。すなわち「我慢する」の対象が一般化されている）

(9) a. あいさつすることは人間関係を円滑にする。

b. あいさつは人間関係を円滑にする。

（「挨拶する」の動作主と相手が一般化されている）

なお，派生名詞の語例は益岡（1987）・森山（1988）を参考に自分で作成したほか，西尾（1961）・鈴木（1972）・北条（1972・1973）・野村（1977）・玉村（1985）を参照した。また，容認度が低いと思われる表現には＊を，容認度が中程度と思われる表現や特殊な文脈でしか容認されないと思われる表現には?，??を付すこととする。

## 2．動作主・経験者の一般化・特殊化

述語文において動作主（自然現象等の主体を含む）はガ格で・経験者はガ格またはニ格で表示される。本稿では，ガ格１項のみを要求する動詞類の派生名詞句の項構造の保持・くずれを中心に考察していく。

## 2.1 動作主・経験者の一般化と「ノ＋名詞」省略の慣用化

ガ格１項のみを要求する動詞類のうち，ガ格が動作主を示す場合の派生名詞句は，項構造を保持する場合，項の形態から以下の２種類（(10)(11)）に分類できる。(10) a.b. は動作主の単独の動作を，(10) c. (11) a. b. は自然現象的事象を示す句である（＊８）。

(10)　ノ格によって動作主を示す。

a.　太郎の泳ぎ（はすばらしい。）

b.　次郎の働き（は高く評価できる。）

c.　年の暮れ（は忙しい。）

(11)　ゼロ格（複合語の語基として派生名詞に吸収された形）によって動作主を示す。

a.　値上がり（が生活を圧迫する。）

b.　老人ぼけ（にはなりたくない。）

動作主の単独動作の動作主が一般化された派生名詞には例えば「酔っぱらい」（＊９）「客引き」が挙げられる。「酔っぱらいは人の迷惑になる」といった場合，誰が酔っぱらいであるかは問題になっていない。動作主が一般化しているのである。

「酔っぱらい」「客引き」はいずれも「酔っぱらいの男」のように「ノ＋動作主」と結合した表現が可能である。やがて，動作主一般を示す場合には「ノ＋動作主」を省略するようになっていったのだと推論できる。また，以下の(12) a. が成立し，(12) b. が成立しにくいことから，「客引き」には動作そのものを示す用法があるが，「酔っぱらい」にはそれがないといえる。

(12)　a. 太郎の客引きが成功する。

b. ＊太郎の酔っぱらいがひどくなる。

自然現象的事象を示す派生名詞には「暮れ」「ぼけ」「生まれ」等がある。「暮れ」については動作主の特殊化の例として，2.2で述べる。

そのほか，ガ格一項を要求する動詞類には「できる」「好きだ」等，ガ格が

対象を示す動詞類がある。これらの語は述語句に含まれる項は対象を示すがガ格のみであるが,「太郎には数学ができる」「花子は釣りが好きだ」のように経験者と共起することもできる。その派生名詞句を項の形態から以下の2種類((13)(14))に分けられる。

(13) ノ格によって対象を示す。
 a. 数学のでき(がわるい。)
 b. 努力の必要性(を強調する。)
(14) ゼロ格によって対象を示す。
 a. (この町には)釣り好き(が多い。)

(14)の類には他に「人嫌い」「女好き」等があり,いずれも精神活動そのもの,もしくはその主体(経験者)を表わす。(14)のように対象がゼロ格で示される場合は「経験者+ノ+対象+派生名詞」という構造で経験者を表現できる(類例:「太郎の人嫌い(は今に始まったことではない。)」)(*10)。そして,「経験者+ノ」が付加されなくなった段階で経験者の一般化がなされ,「人嫌い」といえば一般に人が嫌いであることを示すようになるのである。

「人嫌いの太郎」「釣り好きの男」のように「対象+派生名詞+ノ+経験者」という形式が存在するところから,派生名詞の意味変化にともなう「ノ+経験者」の省略がしだいに慣用化していったものと推論できる。「酔っぱらい(の男)」の場合の「ノ+動作主」の省略の慣用化と同様である。

さらに,意味変化による省略の慣用化は「対象+派生名詞」結び付きが理解されやすい場合に起こるといえる。論拠は以下の3点である。

- 「*太郎好き」のように固有名詞を対象とする場合に「ノ+経験者」の省略がむずかしい。
- 「??台所好き(全員集合!)」のように対象が普通名詞である場合でも特殊な文脈(上例ではシステムキッチンの広告)でしか省略しない表現があり,対象となる語によって省略表現の容認度にちがいがある。
- 「次郎の台所好きは今に始まったことではない」のように経験者を特定す

ると「台所好き」の容認度が高まる。

この現象は動作主・経験者を要求する動詞類には幅広くみられる。ゼロ格は対象を示すことが多いが，対象とは限らない。

(15) a. おじさんがすいかを売る。（動作主＋ガ＋対象＋ヲ＋動詞）
b. すいか売り（のおじさんがやってきた。）… 動作そのもの（＊11）
c. すいか売り（がやってきた。） … 動作主

(16) a. リルが上海から帰る。（動作主＋ガ＋起点＋カラ＋動詞）
b. 上海帰り（のリルはどこにいるのだろう。）… 動作そのもの
c. （リルは）上海帰り（だ）。 … 動作主

(17) a. 電車が東京へ行く。（動作主＋ガ＋着点＋ヘ＋動詞）
b. 東京行き（の電車は9時に発車する。）… 動作そのもの
c. 東京行き（は9時に発車する。） … 動作主

上記の語例やその他の派生名詞から以下の1.から5.への段階が観察される。

(18) 1. 動作そのものを表す用法（上記b.）しかないもの
（例：「格上げ（が実現する。)」「味付け」「里帰り」）
2. 動作そのものを表す用法を主とするもの
（例：「交通整理（のおまわりさん）（しかられた。)」「切符切り」）
3. 動作そのものと動作主の両用法（上記b. c.）ともかなり容認できるもの（例：「付き添い（は疲れる／がやってくる。)」「靴磨き」）
4. 動作主の用法を主とするもの
（例：「見習い（の時の態度が立派だ。／を雇う。)」「借金とり」）
5. 動作主の用法しかないもの
（例：「絵かき（がいない。）」「金持ち」「酔っぱらい」）

これらの各段階にある語の項構造のあり方と意味変化の相を観察していけば，派生名詞から，項構造を失った名詞らしい名詞までの派生段階が明確になるであろうが，とりあえず本稿では以上の指摘にとどめる（＊12）。

動作主の意味をもつ派生名詞には，対象・起点・着点を吸収している語のほか，「東京育ち」のように場所を吸収している語もある。

以上，動作主・経験者への意味変化に伴う動作主・経験者の省略の慣用化を中心に述べてきたが，さらに以下の諸点を指摘する。

(19) 派生名詞には「盗み食いの犯人」「山積みの本」「結婚の相手」「水くみのバケツ」「衝動買いの動機」「さぼりの実態」のように「ノ」を介して主体・対象・相手・道具・理由ありさまなど各種の名詞を修飾する用法があり，その場合，派生名詞は動作・経験そのものを表わす。意味変化に伴う「ノ＋名詞」の省略の慣用化は，ガ格1項を要求する動詞類では動作主・経験者への特殊化がほとんどである。

(20) 「塩断ち」「腕組み」「原価計算」のように同様の項構造をもつ複合語にもこのタイプの意味変化の起きない語が多数存在する。その多くは漢語・外来語も含めてサ変動詞を派生する名詞である。(例外：「猫かぶり」)

(21) 2項以上をとる動詞からの派生名詞の場合，このタイプの意味変化は複合名詞化によってなんらかの格を吸収した場合に多く起こる。(13)のようにノ格が介在するとこのタイプの意味変化は起こりえない。(「?すいかの売り」は動作主にはならないが，「船乗り」「すいか売り」は動作主の意味になる。)とくに，動作・経験の主体が人である場合はほとんどそうである。人以外の場合は「(心の) 支え」「(道の) 妨げ」のようにノ格で対象等を表わしながら派生名詞が動作・経験の主体を表わすことがある。

(22) 上述の語例のほか，「遊び」「歩き」のように動作主が一般化したと考えられる語にも，「ノ＋名詞」と結合しないものがある。これらは種類・手段への意味変化が起こり，その際に動作主が一般化したのだと考えられる。

### 2.2 動作主・経験者の特殊化

自然現象的事象を示す派生名詞「暮れ」には単独で「年の暮れ」の意味を表わす用法がある。「暮れは忙しい」といった場合，「暮れ」は「日暮れ」の意味にはならない。「暮れ」は「年の暮れ」の意味に特殊化 (specialization) している。一般に何かが暮れることの意味ではない。これは項構造のくずれと項の

意味の派生名詞への吸収による意味変化が典型的に観察される例といえよう。項構造を保持している表現（「年の暮れ」）と意味変化による「項構造のくずれ」（「暮れ」）が共時態で併存している状態であり，いわば，「項のくずれかかり」である。意味の特殊化の中間段階が形態面からも指摘できる例であろう。

完全に項がくずれて意味変化した語には「ばね」(「跳ね」から「はね」が派生し「ばね」になったもの）のようにすでに派生名詞とは意識されないものが多い（＊13)。

また，あだ名として用いられる派生名詞句は動作主等の特殊化である。例えば，「金太郎」に「まさかりかつぎ」というあだ名をつければ，まさかりをかつぐ主体は特殊化していることになる。筆者は現在のところ広く知られている派生名詞のあだ名の例を思い出せないが，現象そのものは広範に観察される。

なお，「(会社の）お茶くみ」,「（新米の）ぞうりもち」,「(相撲部屋の）ふんどしかつぎ」なども動作主を示す用法があるが，これらの語は使用場面が対応する動詞（「お茶をくむ」「ぞうりをもつ」「ふんどしをかつぐ」）よりも限定されており，結果として動作主が限られた範囲に限定されているといえる。ただし，これらの語は　動作主を特定できないので，むしろ，動作主の一般化と理解されるべきである。動作主の範囲の限定が語の意味でなく，使用場面から説明される点で「暮れ」や「ばね」やあだ名の場合と異なる。

## 3．対象の一般化・特殊化

### 3.1　対象の一般化

まず，ガ格１項のみを要求し，そのガ格が対象を示す場合をとりあげる。(23)a. は(13)a. の再掲で，述語句の外に経験者を示す語をとれる点で(13)(14)と同じタイプの語である。(24)a. b. c. は変化的な意味を示す語で，対応する他動詞をもつ自動詞から派生であり，いずれも項構造を保持している。

(23)　a.　数学のでき（がわるい）

　　　b.　でき（のわるい子）

(24)　a.　洗濯物のかわき（がわるい。）

　　　b.　変化球の切れ（がよい。）

c. 実力ののび（がはやい。）

(23)a. は項構造を保持しているが，(23)b. は対象が一般化されている。「??この子は本当にできないんですよ。」のように文において対象を省略もしくは一般化する場合は特定の前提（例えば，学校の成績を話題としていること）を必要とする。「数学が」というように対象を明示すれば文脈の助けは必要なくなる。一方，「できの悪い子」は文脈の助けを必要としない。(23)a. b.のどちらも成立することから，派生名詞「でき」の項構造はくずれかけであるといえる。

ちなみに，「上出来」や「横好き」は対応する動詞をもたない。「＊数学の上出来」「＊将棋の横好き」が容認不可能であることから，接辞付加によって動詞素性を失い，項構造がくずれたものと考えられる。

(24)に類する派生名詞には「まがり」「ぬれ」「ふくれ」「こわれ」「溶け」などの語がある。これらと共起する述語には「いい」「わるい」「ひどい」等の変化の程度を表わす述語や，「見る」「試す」「確かめる」等の観察を表わす述語が多いようである。

次に，２項以上を要求する動詞のうち対象が一般化している語を調べてみると，定着度の高い派生名詞として「教え」「祈り」「考え」等精神活動を示すが見られることに気付く。

(25)　K牧師の太郎に対する教え（は深遠だ。）

(26)　次郎の神への祈り（が通じた。）

このような精神活動を示す語はその対象が重層的である。例えば，「K牧師が太郎に愛を教える」といった場合，「愛」の何について「教える」のかを問うことが可能で，「愛の実践」，「愛の実践の方法」，「愛の実践の方法の実践例」のように「教える」対象として比較的大きいレベルと比較的小さいレベルを想定することができる。この種の精神活動については，その対象の大きいレベルを複合助辞「について」で，小さいレベルをヲ格で表す表現（(27)b.）が成立する。また，大きいレベルを示す語と小さいレベルをしめす語の間に「の（うち），特に」を介した表現（(27)c.）も成立する。

(27)　a. 愛を教える。

b. 愛についてその実践の方法を教える。

c. 愛の（うち），特にその実践の方法を教える。

またこの種の動詞は精神活動の具体的内容を引用のトで示すことができる。

このような精神活動を示す派生名詞「教え」，「祈り」，「考え」等は一般にその重層的で複雑な対象・内容をすべて含み込んで一般化している。対象が無指定であるというよりは，対象のすべてを指示する可能性を示しているのである。その点でほかの語類における対象の一般化と異なる。

この種の派生名詞句は対象を示す項をノ格で示すことができず，項構造はくずれている（(28)(29)）。

(28) a. 文章構成を考える。

b. ??文章構成の考え（が浮かぶ。）

c. 文章構成について考える。

d. 文章構成についての考え（が浮かぶ。）

(29) a. 幸福を祈る

b. ??幸福の祈り

ほかに「望み」「願い」などがある。

また，「話（し）」「説明」「講演」等，口頭による活動を示す語もこれらと同様，活動内容への意味変化が観察される。これも活動そのものがその対象と直結する性質によるものと考えられる（(30)）。

(30) a. T先生の説明（は明日行われる。）… 説明の動作そのもの

b. T先生の説明（はわかりやすい。）… 説明の内容

また，「悩む」「苦しむ」は一般にニ格によって原因を示すとされる。（(31) a. (32) a.）が，ヲ格をとることもある（(31) b. c. (32) b.）。このヲ格には対象の意識が現れているようである。

(31) a. 恋愛に悩む

b. 成績の悪さを悩む

c. 何を悩んでいるんだ？

d. 恋愛の悩み（が尽きない。）

e. ？成績の悪さの悩み

(32) a. 病気に苦しむ

b. 何を苦しんでいるんだ？

c. 病気の苦しみ（に耐える。）

(31)のa.とd.，b.とe.の対比から，これらの語類では文中のニ格が派生名詞句のノ格と対応するといえる。一般に文中のヲ格が派生名詞句のノ格とよく対応すること，他の語類では文中のニ格と派生名詞句中のノ格の対応が見られないことを考え合わせると，精神活動の対象とその所在の連続性を示す事例といえそうで，興味深い。

そのほか，「受け取り（＝領収書)」も対象（＝受け取るもの）が一般化し，さらに，語の意味が他に類例の見られない変化に起こしている。これも「ノ＋名詞」（例えば，「の証明書」）の省略の慣用化によるものと推論できる。「思いつき」，「かざり」も対象の一般化の例である。

### 3.2 対象の特殊化

「縮み（縮み織りの意)」や「氷（「凍り」から）」は(24)に示した語類，すなわち自他対応をもつ自動詞の対象（ガ格）が特殊化した例である。対象が特殊化し，語の意味も変化すると同時に，項構造がくずれているため，派生名詞としての意識は一般にかなり薄いのではないかと思われる。これも，2.1で述べた「ノ＋名詞」の省略で「縮みの織り物」「縮み織り」「縮み」という順に慣用化してきたものと推論できる。

2項以上を要求する動詞のヲ格の示す対象が特殊化した例として「つまみ」「差入れ」「手提げ」などがあげられる。

これまでの筆者の観察では，「対応する動詞が現在使用されず，サ変動詞の派生もない派生名詞」には，なんらかの意味変化が起こっている。「すくい投げ」「売れ行き」がその語例である。逆に，動作そのものの意味を表わす場合は，対応する動詞またはサ変動詞の派生があるのが自然である。したがって，動作そのものの意味を表さない場合に動詞になれないという観察は妥当なものといえそうである。

## 4．その他の格成分の一般化・特殊化

「はかり」「はたき」は，「はかる」「はたく」のデ格で示される道具が特殊化し，その意味が派生名詞に吸収されたものである。動作主その他の格成分は語の意味が具象物に転化するときに一般化され，項構造は完全にくずれている。「はかり」「はたき」はいずれも具象物の名称であるうえ，道具は一般に動詞が要求する必須の項ではない（述語句に含まれない）ので，「はかりではかる」「はたきではたく」といった表現が完全に容認される。

「上り電車」の「上り」は「??東京の上る」とはいいにくいことから，着点が特殊化している例だとはいえるが，歴史的にみれば，動詞の段階ですでに着点が特殊化しており，その意味が派生名詞にのみ残った結果だといえそうである。

「洋服掛け」「筆入れ」は着点が，「通り（道）」「受け付け（＝受け付けるところ）」は場所が特殊化した例である。

## 5．格助詞置換の派生名詞句への応用と連体複合助辞

本稿を終える前に，派生名詞句の形態面，特に格助詞について若干の指摘をおこないたい。

森山（1988）で提案されている格助詞置換分析は派生名詞句分析にも欠かせないものである。格助詞置換分析とは，互換可能な格助詞（複合格助詞も含む）を考えることによって格パタンと述語句の意味をより精密に分析しようとする試みであるが，単に森山氏のいうように意味分析に有効なだけでなく，派生名詞句の形態を論ずるうえで格助詞置換は必要である。我々は実際の言語生活の中で派生名詞句を運用する際に格助詞置換をおこなっている。特に「＊ニノ格」が存在しないため，文におけるニ格は派生名詞句中ではさまざまな格助詞で表現される。また，二つの項（典型的には動作主・経験者と対象を示す項）がノ格の並列で派生名詞を修飾すると容認度が非常に低くなる。その場合，多くは二つの項に格助詞の置換か派生名詞への吸収（＝ゼロ格への置換）が起こる。以下，実例を示す。

(33) a. その時小坂乙彦の精悍な感じの顔に，ふと暗い影が走るのを魚津は見た。

（井上　靖「氷壁」）

動詞「感じる」は「経験者＋ガ＋対象＋ヲ＋（引用）ト＋動詞」という構造をもっていると考えられる。そこで，(33)a. 下線部の派生名詞句を以下の(33)b. からの派生と仮定する。

(33)　b.　魚津が小坂乙彦（の顔）を精悍に／精悍だと感じる。(＊14)

以下，これを手がかりに格成分と派生名詞の関係を考察する。

(33)　c.　魚津の感じ（経験者＋派生名詞）

b.　小坂乙彦の感じ（対象＋派生名詞）

e.　＊魚津の小坂乙彦の感じ

f.　魚津の小坂乙彦に対する感じ（経験者＋対象＋派生名詞）

g.　魚津による小坂乙彦に対する感じ

(33)c.，(33)d. はともに派生名詞に 1 項を加えたものである。この場合，経験者・対象はいずれも「ノ」をともなうことができる。ところが，(33)e. のように経験者・対象の両方に「ノ」を後接して 2 項を並立させることはできない。この場合，対格に「ニタイスル」を加えることがある（(33)f.)。(33)f. は魚津が小坂に対して抱く印象といった意味であるが，魚津が小坂に対するときに他者に与える印象とも解釈され得る。その難を解消するのに「ニヨル」を経験者に加える方法がある（(33)g.)。これら「ニタイスル」「ニヨル」は，他の格助詞との用法上の対応や動詞としての意味の抽象性の高さから，連体修飾にのみ用いられる複合助辞的成分だといえる。

このような「連体複合助辞」として考えられる語には「ニヨル」「ニタイスル」のほか，「ニオケル」「ニタイシテノ」「ニムケテノ」「ニオイテノ」「ニカンスル」などがある。引用や様態の副詞的成分も「（じっくり）とした（取り組み)」のように，派生名詞句の中で連体修飾成分となることができる。「トシタ」のほか，「トイウ」「トイッタ」「トノ」などが多く使われる。それぞれの用法や他の格助詞等との意味の異同は課題としたい。

派生名詞化の際の格助詞置換を検証することは述語句の意味分析にも有効であると考えられる。例えば，森山（1988）p. 76でト格の意味が同一的・引用的・

相互的の三つに分けられているが，派生名詞句では同一的ト格はヘノ格になることがあり，他の二つはトノ格になるというように，意味の相違が形態になってあらわれることがあるのである。

## 6．今後の課題

本稿では，項構造のくずれと意味変化の関係を中心に名詞句派生の諸相を概観し，共時態から変化の過程にある諸相を段階的にとらえることを試みた。今後は派生の段階を意味と形態の両面から，より一般化された形で示すことが必要となろう。派生し得ないパターンの発見から一般的な派生上の制約を導き出すことも考えられる。

意味についていえば，項構造を保持しながら意味だけが変化している場合（「食べ方」「必要性」等，接辞付加による場合も含む）の意味変化の類型も本稿では詳しく検討できなかった。項構造を保持している場合に意味変化になんらかの制限がはたらくことも予想されるため，今後，これを検討していくことによって派生名詞句の意味派生の全体像を明らかにできるはずである。

また，派生名詞句と「の」「こと」による文の名詞化との違い・サ変になる語とならない語を区別する要素などの究明や，項の省略の分析の談話分析への応用も取り組むべきテーマである。

派生名詞句の分析には派生以前の述語句の構造・意味の分類との対応を考えていくのが有効である。意味的には動詞類の情報を担っていることが多いからである。どのような動詞類が派生名詞化しやすいのか。はっきりしたことはいえないが，私見では，語そのもののもつ意味だけでなく，表現意識とも関係しそうなので，語用論的な考察が求められるであろう。それを語意の問題に還元すれば，どのようなコンテクストをうみだす語かを考える問題となるかもしれない。

動詞類から派生名詞へ，派生名詞からさらにサ変動詞へ，そのような変化の中にある言語の曖昧さや連続性・意味派生の類型・表現意識と語形成の関係・語彙論と統語論の相関など言語の世界で普遍的に観察されるであろうさまざまな現象が，派生名詞句をめぐる世界には豊富に存在する。それらが相関する世界をときほぐして論ずるには，本稿はあまりに不十分な考察であるが，今後の研究の出発

点としたい。

（付記）

本稿の校正期間中に，5．および6．で述べた諸問題について筆者なりに新たな分析を行い修士論文に記したが，それについては今後，なんらかの形で発表したいと考えている。

## 注

＊1　井上（1976）の用語によるが，一部，井上ではあつかわれていない表現形式もとりあげる。

＊2　杉岡（1989）p. 168による。「意味役割」「主題役割」といういう語は生成文法研究者による訳語と思われるが，本稿では「意味格」「意味上の格成分」と同様の概念を表わすと理解して差し支えない。

＊3　サ変動詞は漢語動詞に代表されることが多いが，「デートする」のような外来語動詞や「あくびする」「飢死にする」などの和語サ変動詞も漢語動詞に類する性質をもつと考えられるので，「サ変動詞を派生する名詞」をまとめて考察の対象とする。

＊4　杉岡（1989）において接辞等の付加による合成語の非主要部からも項構造を受けつくことができることが説明されている。接辞等の付加は主として意味の特殊化の役割を担っており，項構造は派生名詞による語基の部分が担っていると考えられるため，本稿で合成名詞を対象としても問題はさほど複雑にはならないものと考える。

＊5　「語の意味が歴史的に変化すること」（成美堂『現代言語学辞典』）であるが，本稿では歴史的にみて動詞から名詞への派生かどうかわからない語の多義性も考察の対象としている。また，転用や比喩的拡張等による一時的な多義派生が慣習化されることにより語そのものの意味が変化するのだとすれば，語義として定着していない意義も広義の意味変化によるものと考えられる。歴史的変化の如何にかかわらず，「同じ語と結びついている意味の間の（中略）有契性（motivation）というものが本質的に心理的なものであり，人間の心の動きに普遍的な特徴が認められる限りにおいて，記述上の枠組としては，共時的な記述にも通時的な記述にも共通のものを使いうる」（池上（1975）p.250）という立場により，本稿の記述をすすめる。

＊6　以下，「対象」「経験者」「着点」等，項の内容の分類は益岡（1987）p.106による。

＊7　杉岡（1989）では単純和語動詞の連用形は項構造を保持しないとされ，それ以外の複合動詞連用形・動詞連用形複合語・漢語動詞語幹は項構造を保持するとされているが，拙見では全体としてそのような傾向ははっきり認められるものの，実際には前者にも「太郎の大阪での泊まり（動作主＋場所＋派生名詞）」のように項構造を保持している語が多数あり，後者にも「千代の富士のすくい投げ（「すくい投げ」は相撲の決まり手の一種）」のように項構造のくずれている（動詞主＋派生名詞とな

り，対象は表示できない）語が少数ながら存在する。「すくい投げ」に対応する動詞である「すくい投げる」は容認度の低い語であるが，杉岡（1989）では動詞連用形複合語の例として対応する動詞がほとんど使用されない「立ち読み」を挙げ，「まんがの立ち読み」を項構造保持の傍証としている。その観点からは「千代の富士」が対象と理解されてもよいはずだが，そうはならない。

＊8　句の意味のタイプは森山（1988）第3部第1章に負うところが大きい。

＊9　「酔っぱらう」はニ格をとるとも考えられるが，一般に「酒に」は情報として「酔っぱらう」に含まれていると考えられ，「??酒での酔っぱらい」という表現がされにくいことから，この類に含めるのが適当であろう。

＊10　文中の経験者のニ格が派生名詞句でノ格になることは，経験者が動作主とどこかでつながることを示す事象として興味深い。

＊11　「駅員のおじさん」等の用法と同様に「すいか売りのおじさん」の「ノ」を同格と考え，「すいか売り」を動作主とみなす考え方もあるが，その解釈が成立するのは「すいか売りの」が非制限用法として働いている場合だけだと考える。すなわち，発話の前提で「おじさん」が誰であるかを特定できる場合は同格の「ノ」と解釈し得る。が，「里帰りの妻」の場合，「里帰り」に動作主の意味はない。「妻」が，特定の人物を指示する場合でも「ノ」を同格と考えることはできない。同様に「組み立ての解説書」「釘打ちの道具」の「ノ」も同格とは考えられない。「味付きの海苔」といった場合，一方に味のついていない海苔のあることが想定される。これらの事実から，「すいか売り」も基本的には動作そのものを表し，「ノ」を介して「おじさん」を修飾しているのだと考えるべきであろう。また，前述の「台所好き（全員集合！）」のように特殊な文脈でしか動作主の意味になり得えない語は語そのものが動作主の意味をもっているとみなすことができないので，文脈によって動作主の意味に理解され得るという点で，動作そのものから動作主への語としての意味変化（単語の新用法の慣用化）は連続的であるともいえる。

＊12　グリーン（1989）深田訳（1990）p.67−80によると，Nunberg は多義の中からどのようにして指示と解釈がなされるかについて，「標準的所信（normal belief)」という用語を用いながら一般的な条件を提出し，単語の用法の慣習化の段階について解説している。

＊13　西尾（1961）p. 65に「霧」（「霧る」から），「境」（「境ふ」から），「歌舞伎」（「かぶく」から）などの語例があがっている。

＊14　「小坂乙彦（の顔）が精悍だ」という文が「ト」に導かれ埋め込まれていという分析も考えられるが，「犬を怪獣と感じる」のように「対象＋ヲ＋（引用）＋ト＋動詞」という形式の存在や埋め込み文を越えて「小坂乙彦の感じ」という名詞句が派生されることを考え，本稿では(33) b の文を仮定する。

ちなみに，益岡（1987）第2部第1章・第4章では「ト」に導かれる省略不可能な補語を「副詞的補足語」と呼び，動詞の語彙情報の辞書に「引用語」として記載されるべきだとしている。

**［引用文献］**

池上嘉彦（1975）『意味論』大修館書店
井上和子（1976）『変形文法と日本語・上』大修館書店
杉岡洋子（1989）「派生語における動詞素性の受け継ぎ」久野　暲・柴谷方良編『日本語学の新展開』くろしお出版，p. 167－184.
鈴木重幸（1972）『日本語文法•形態論』むぎ書房
田中春美ほか（1988）『現代言語学辞典』成美堂
玉村文郎（1985）『日本語教育指導参考書13　語彙の研究と教育（下）』国立国語研究所
西尾寅弥（1961）「動詞連用形の名詞化に関する一考察」国語学会編『國語學』第四十三輯，武蔵野書院，p. 60－81.
野村雅昭（1977）「造語法」『岩波講座　日本語9　語彙と意味』岩波書店，p. 245－284.
北条正子（1972）「サ変になり得る名詞」鈴木一彦・林　巨樹編『品詞別日本文法講座2　名詞・代名詞』明治書院，p.211－222.
北条正子（1973）「サ変になり得る名詞（漢語）」鈴木一彦・林　巨樹編『品詞別日本文法講座10　品詞論の周辺』明治書院，p. 185－230.
益岡隆志（1987）『命題の文法－日本語文法序説』くろしお出版
水谷静夫編（1983）『朝倉日本語新講座3　文法と意味I』朝倉書店
森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院

（まつした　たつひこ　日本言語文化）